

SAMPLE
SM小説

試読
18

亜由美

第二部

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

<http://unpluggednovel.blog109.fc2.com/>

SAMPLE

ここまで

試読



ダメになった私を

どうか

見捨ててください。

SAMPLE

試読

目次

第一部のあらすじ	4
リアル亜由美ゲーム	5
主な登場人物	7
＜本編＞	
宣言	8
なりきる	32
通過儀礼	64
トリプル	89
公園	121

大学	137
鞭打ち調教	164
水着陵辱	200
缶チューハイ	222
商店組合	251
病院	293
尿道オナニー	321
クリ拡大	347
羞恥講義	367
苦手克服	418
飲精・飲尿・尿浣腸	449
来訪者たち	484

パレード 514

逃走中 556

打ち上げ 603

奥付 646

この作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません。

第一部のあらすじ

亜由美は念願の大学へ入学したが、そこで剛介と再会する。兄の友人だった剛介によって、辱められ、処女を奪われることを、密かに望んでいた自分がいた。

だが剛介はそんな亜由美の気持ちをはるかに上回る陵辱、調教を繰り返し広げる。「亜由美の会」のメンバーによる輪姦は、やがてゲームづくりへと発展。亜由美は自ら、「亜由美の会」の

総会でゲームづくりを提案し、懇願した。

リアル亜由美ゲーム

シナリオ五種類

- 1、ソフト 恥辱
- 2、ソフト 陵辱
- 3、ハード 調教
- 4、ハード 輪姦
- 5、超ハード 拷問

コスプレ3種類

ロープ系

ブタ系

スクール水着系

エンディングは3パターン

- 1、廃棄
- 2、転売
- 3、お楽しみ

主な登場人物

亜由美 女子大生

剛介 その大学の先輩で亜由美の兄
の友人

村木（警備員）

岡山（アダルト店店主）

末土（教授）

長崎（薬局店主で岡山の弟）

園田（ゲー研）ほか。

宣言

総会が終わったあと、会員の数が多
いこともあり、あらゆることが同時に
進んでいった。

さんざん犯された亜由美は、全員と
ハメ撮りさせられた。

部屋に戻ると体を洗われて、これま
での落書きもすっかり消された。

翌日、ベランダには幅一メートルほ
どの組み立て式ケージが置かれた。室
内用のペット用ケージだが、蚊帳でく

るまれた上に、ブルーシートで外側を覆っている。虫除けも置かれた。ケージの中には段ボールが敷かれている。

「気にいったかな。これからは、そこがおまえの寝場所なんだから。ほとんど寝ている暇はないだろうけどね」

剛介は、酷薄な言葉を亜由美に投げかけた。

「ここで？」

「そうだよ」

ほとんどの家財が捨てられるか、会員たちによって持ち出され、亜由美の

部屋はガランとしていた。

床や壁に透明なビニールが張られ、ビデオカメラ、三脚、照明スタンド、レフ版、編集用のパソコン、そして亜由美を責める道具などが運び込まれていた。

残された毛布にくるまって、亜由美はベランダのケージの中にいた。

「ケツ穴をちゃんと使えるようにしておきたいんだよなあ」

剛介はそうつぶやいている。

会員たちも興味津々だ。

撮影などを実行するゲー研の者、そしてあわよくば、亜由美を犯そうと待っている会員たち、八人が部屋にいた。

常時、3Dカメラやビデオカメラなどで撮影されることになる。会員たちは、どんなときでも、いつでも、亜由美を自由に撮影できる。

そして、その映像を使ってゲームが作られていくことになる。

剛介が亜由美を引きずり出す。誰かが撮影をしている。

「立って」

落書きのなくなったきれいな体を、
くまなく見せる。

「恥ずかしい……」

「なに気取ってるんだよ。ほら、そこ
に気をつけしろよ」

手で体を隠すことも許されない。す
べてを晒すように、亜由美は直立不動
になる。。

字のうまい会員がマーカーを手
にしていた。

乳房のすぐ下に、「淫乱メス豚」と
黒々と文字が綴られる。その下に「18

歳 亜由美」。さらにその下に「撮影中」と、まるで看板を下げたように、大きくヘソのあたりまでをその文字が占める。

ヘソから下には「遠慮なく髭ってください」と書かれた。

「これがゲームのタイトルなんだから」と剛介。

そして背中を向いて、正座をさせられる。

肩胛骨の間に「メニュー」と書かれる。その下に「全裸生活」、「むだ毛全

処理」、「排泄管理」、「大量浣腸」、「ケツ穴拡張」と、比較的、小さな文字を、男がメモを見ながら丁寧に書いた。

「これから、おまえがクリアすることを書いていくんだよ。体が真っ黒になるぐらい、いろんなことを経験するんだ」

それをカメラが写すだけで、タイトルになる仕掛けだった。

「さあ、みなさんをお願いすることがあるでしょ？」

亜由美は向き直り、額を床にこすり

つける。

「『亜由美の会』のみなさま。これから、亜由美は自分の意思で、みなさまのどのような要望にもお応えさせていただきます。いつでも、どこでも、なんでもいたします。どうか、末永く、亜由美をお楽しみください」

そして顔をあげると、そこに「契約書」が置かれていた。亜由美は、それを読み上げる。

「私、亜由美はみなさまの要望に自分の意思で応えます。どのようなご命令

にも従います。その結果、私の体がどのようなことになっても、私の責任です。また、みなさまのご要望にお応えできなくなったときは、いつでも、私を廃棄していただいてもかまいません。私がどのような傷害、損失を被ろうとも、自業自得であり、どなたにも責任を求めることはありません」

そして、署名し、拇印を押した。

しだいに、それはゲームのシナリオなのか、現実のことなのか、亜由美にも剛介たちにも、区別はつかなくなっ

ていった。

「よし。さっそくケツ穴からやろう」

亜由美の尻を平手で打ち据えて、

「ほら、見せて」と命じる。

亜由美はお尻を持ち上げて、部屋の中に向けてすべてを晒す。

「マーカ―が三本は入ったんだから。直径で三センチは楽に入るんじゃないかな。四センチのピンポン球も入ったしね」

剛介の指が、小さくすぼまっている排泄器官をまさぐる。

「どのくらいまで広げようか」と誰かが言う。

剛介は自分の拳を見せる。

「そうか。最終的にはそうだよね。ダブルフィストなんてのもあるくらいだからなあ」

「限界まで広げるってことでいいんじゃないかな。だけど、先に、みんなのものが入るくらいにはしたいよね。どうかな、亜由美」

剛介の問いかけは絶対だった。

「はい。ぜひ、みなさんに、亜由美の

お尻を犯していただきたいと思いません。存分に、広げてください。そして、前と後ろで同時に犯してください。できれば、フィストができるぐらいまでに広げていただきたいのです」

そこまで、亜由美に言わせる。

言ってみて、自分が主役なのだと、彼女はあらためて感じていた。どんなにみじめに、そしてボロ布のように扱われようと、自分がいなければ、このゲームは成立しない。

この場で、もっとも下位にあって、

なに一つ、自分では選択することができないのに、主役になっている。

それは、いままで経験したことのない甘美な出来事に思えた。

無遠慮な男たちに、亜由美はその間、じっと尻を見せつけながら待つ。

「自分で指を入れてみる」

亜由美は自分の人差し指を舐め、股の間から尻へ向けた。

膝を曲げて、指先をすぼんでいるアナルに押しつけた。

以前からやっていることで、抵抗は

少なかった。

第一関節を入れたところで、会員の一人が自分の指を舐めて、そこに一緒に入れてきた。

「あひっ！」

「もう感じてるのかよ。もっと広げてみようぜ」

亜由美の指は下方向に、男の指は上方向に、アナルをこじ開ける。

いそぎんちゃくのような生物が、「オー」と声を出しているように見える。ピンクのシワが伸び、粘膜がめく

れてくる。ぽっかりと暗い穴が開く。

「ムリです。これ以上は」

「ぜんぜん小さいじゃん」

「少し練習をサボるとこれだからなあ」

剛介がぼやく。

休みの一日を、一切なにもせず過ごし、最後に会員全員による輪姦こそ行ったものの、アナルのトレーニングは二十四時間、中断していた。

亜由美はダブルピッカーカテーテル、エネマシリジンジによる大量浣腸

の用意をする。

一度目は、通常のグリセリンを薄めたもの。ゲー研の会員たちが、それぞれにカメラを構える中で、自ら腸内にゴムの管を入れ、バルーンをふくらませ、注入する。

「もっとケツを上げろ」

「顔をこっちに向ける」

ただ浣腸すればいいというわけではない。撮影する会員からの怒号に「はい」と返事をしながら、従わなくてはならない。

体を不自然にねじり、苦しい中腰を強いられ、骨が音を立てそうな格好をしながら浣腸を続ける。

もうこれ以上は入らないぐらいポンプを押したが、「ほら、もっと入れるんだ」と言われ、さらに液体を注入する。

「もっと。もっと」

「はああ。苦しい。ダメです」

「しょうがないな。じゃ、どれぐらい我慢できるかだな。その間、お口でしゃぶる？ 誰か、やってほしいやつ、

いないかな？」

誰も手を挙げない。昨日の今日ということもあったが、撮影という条件で怯んでしまうのだ。

こうしたことに耐えられる人間はそう多くはない。

「じゃ、これでもくわえて」と誰かが持って来たシリコンの男性器を模したオモチャを亜由美に突きつける。

「待て」と剛介。「これじゃ、ありきたりすぎるじゃん。亜由美はメス豚なんだから、こんなものは似合わないよ。」

普通の女の子が使うようなものはダメだよ」

「じゃ、なにがいいかな」

剛介はバスルームに行き、そこからトイレ掃除用のブラシを持って来た。

「これをしゃぶるんだ。そして、最後は自分のおまんこに入れる」

「そ、それは……」

亜由美はかなしげな顔をした。

「黙ってやれ。メス豚女子大生の過激なオナニーだぞ」

亜由美は、手でブラシの柄のホコリ

を拭いながら、唇をそっとつける。部屋は静かになった。

舌を出して、男性器のように舐め、続いて口に含む。唾液が糸を引き光る。たっぷりと唾液をつけるために、えづくほど深くまで呑み込んでみせる。

プラスチックの青い柄は、それほど唾液が染み込まない。必死に舐めて、自分の痛みが少しでも和らぐようにする。

剛介が、目で合図する。

亜由美は覚悟を決めて、ブラシの柄

を自分の、昨夜から今朝にかけて散々、
なぶられた部分にあてる。

あまりにも激しく粘膜を擦られた
ためか、性器全体がぷっくり膨らんで
いるようにも見えた。

実際、柄の先端をそこにあてるだけ
でも痛かった。許しを請う目を剛介に
送るが、無視される。

少しずつ、粘膜の中に柄を入れる。

「ううう」

一センチ、二センチと入る。ヒモを
通すための穴の部分が、ほとんど肉体

に埋没する。

亜由美は再び剛介を見る。剛介は「もっと」と言っている。

「はあー」と息を吐く。

腸に詰め込まれた浣腸液が暴れている。外に出たいとうごめいている。腸が破裂してしまうのではないかと思える。

さらに、女性としてもっとも大切な器官、その腫れた粘膜を切り裂くように、プラスチックが押し込まれていく。しかも、それをやっているのは亜由美

自身なのだ。

柄のかなりの部分が入ったあと、剛介は、手を動かせと合図する。

亜由美は首を横に振る。

剛介は許してはくれない。

「お願い。はあはあ。許してえ」と亜由美は口走る。

それは、あたかも想像上のマスターの声に応えているかのようだ。

「ああ、だめー」

引き抜きながら、亜由美は大きな声を出す。

そしてまた沈める。

何度か繰り返していると、枯れたのではと思われた泉が復活し、淫水がこぼれ落ちた。

くちゆくちゆとしだいに、猥らな音を立てはじめる。

自分のことながら、どこまでやれば気がすむのだろう、と亜由美は思うのだった。

なりきる

何度も何度も、亜由美は自分の秘部をトイレブラシの柄でさいなんだ。

剛介が、許しを与えるかのように、洗面器を亜由美の手の届く場所に置いた。

「ふー、ここに出さないといけないのですね。メス豚にトイレなんて、ないんだから……」

そう言いながら、洗面器にまたがる。バルブを緩める。すーっと空気が出て

いく。手前のバルーンがしぼむ。

肛門を大きく広げながら、中のバルーンが飛び出しそうになっている。

その空気を少し抜くと、内部の圧力で、バルーンが押し出されてきた。

粘膜がめくれあがった。しぼみきらないバルーンがぬるっと出た。

「うあー、見ないで……」

亜由美も思いがけなかったのだろう。驚きながらもバルーンを排泄すると、そのあとから、ドドッと音を立てて汚物が続いた。

「ふえーん、止まらない……」

洗面器がたちまちいっぱいになった。

いっきに汗の噴き出した亜由美は、背徳的な快感と恥ずかしさにどっぷりと浸かる。悲しげでいながら、微笑むように目を細めている。

その惚けたような顔をカメラは撮影する。

「さすが淫乱なメス豚らしいな。たっぷり汚いものを腹に溜めこんでいたんだね」

剛介が言う。

「おまけに、なんだよ、はしたない出し方してさ」

「すみません」

「よく、人前であんなことできるよな」

どのぐらいそうしていたのだろう。やがて、すっかり終わったらしく、亜由美は重い腰を持ち上げて、洗面器を手にした。

「そんなこと、ぼくがやりますよ」と会員の一人が剛介に言う。

「なにを言ってるんだよ。ダメだよ。
全部、亜由美にやらせなくちゃ」

亜由美はバスルームにそろそろと
行き、中身を流した。

自分の尻や下半身をバスルームで
洗った。洗面器は、キッチンの流し台
に持っていく。そこにはグリセリンの
瓶や、カテーテルが並んでいる。もは
や料理をする場ではない。

裸のまま、器具を丁寧に洗っていっ
た。

「撮影を一度、止めてください」と宣

言したあと、剛介は七人ほどいる会員たちに、こう言った。

「いいですか。『亜由美の会』は、亜由美のファンクラブというだけじゃない。亜由美の実写版のゲームを作るけども、彼女はヒロインでも、女優でもない。メス豚なんですよ。目的は、このメス豚の生態を記録していくことなんです。だから、みんなは彼女のことを、必要以上に気遣ったりしちゃいけない。そうじゃないと、ゲームとして甘さが出てきてしまうんじゃない

いですか？」

ゲー研の園田は、うなずいた。

「そうだな。確かにね。これを楽しむのはぼくたちや、ゲームをやる人たちなんだから、亜由美が楽しむ必要はないわけだね。じゃ、これからも、厳しくやりましょう」

剛介は亜由美の横に行き、耳元にささやいた。

亜由美は床に正座した。

「メス豚の亜由美を、みなさんのお好きなように、こき使ってください。な

んでもいただきます」

あらためて、宣言し直した。

さらにくるりと向きをかえて、尻を差し出した。

「どうか、私のお尻の穴を徹底的に広げてください。いろいろな、普通の女の人がやらないようなことをしてください」と頼んだ。

剛介は「みなさんにお願いしなくちゃダメだよ」と囁いただけだった。セリフの大半が亜由美の考えだった。驚いた表情を見せないようにしていた

剛介だが、思わぬ深みに足を取られて
しまったような気もした。

「もう一度」

カメラのスイッチが入り、そこに向
かって媚びるような亜由美の懇願が
入り、二度目の浣腸。

長い時間をかけて、苦しみ、排泄す
る。

そしてバスルームで、シャワーによ
る洗腸。

亜由美は手慣れたように、シャワー
ヘッドを回して取ると、ホースから水

を垂らし、アナルにローションを塗ってから、それを五センチほど体内に沈める。

勢いよくぬるま湯が腸に注がれていく。

やがて逆流しくると、柔らかな粘膜を広げて噴き出す。

「うっふー」

亜由美はため息をつきながら、しばらく腸の中を洗った。

その間に、剛介はピンポン球を用意した。

普通の女性に対するようないたわりを拒絶する一方、最後まで撮影しきるための気遣いだけは、会員たちの間に自然に生まれていた。

「これもつけたい」と、会員が持って来たのは、首輪と鼻フックだった。

首輪はペットショップで売られているような、細い赤い革製で、小さいがしっかりした南京錠がついていた。

「これをつけたら、一生、外せない」と持って来た会員が言うのだ。

南京錠の鍵が三つついているが、ど

れも、真ん中あたりから、ねじ切られていた。南京錠はいま開いているが、それを閉じたら、簡単には外せなくなる。

「どうしようか」と剛介は、亜由美に差し出した。

細い首に首輪を巻き、ベルトで調整した。少し緩くすると、ファッションでつけているように見える。しかし、亜由美はさらにベルトの穴を数個縮めた。そして、首を動かしてみる。支障はないものの、指一本入らないほど、

ぴっちりと締めている。

そして剛介が止める間もなく、亜由美は南京錠をパチンと閉じてしまった。外すことも緩めることもできない。いざとなったら、切断するしかないだろう。

「いいの？」

「はい。メス豚ですから」

そして鼻フックを手にした。

「それは、つけても痛いし、恥ずかしいけど、外すときもスゲー痛いんだ」と会員が言う。

「ありがとうございます」

亜由美は、目を細め、整った鼻に金属のフックを入れ、ベルトを頭に回した。

「首輪に固定できる」と会員が、手伝って、容赦なく強く引く。

亜由美の鼻は押し潰されたように上を向いてひしゃげ、鼻の穴が真正面に、これみよがしにさらけ出された。

本来、見せることのないところを、誰にでも見せつけなくてはならない。これは、亜由美のこれからの毎日の基

本だ。

鼻フックのベルトを首輪のうしろにある穴に通して固定する。

ただでさえぴったりの首輪なので、鼻フックに引っ張られて、斜めに締め付けていた。これが、シナリオにあったブタ系の亜由美を強調する姿になる。

「よし。責めるときには、いつもその格好でいるんだからね」

唯一、残された家具とっていい姿見を誰かが持って来る。亜由美は自分

の姿を、じっと見る。その頬、そして
体全体が桜色に染まっていく。

「恥ずかしい？」

「はい。たまらなく恥ずかしいです」

剛介も、会員たちも、生唾を呑み込
んだ。

背中メニューに、首輪と鼻フック
が書き足された。

剛介は、亜由美が本気でなりきろう
としていることに驚いていた。一秒で
も早く、戻ることのできないところま
で行こうとしているように見えた。

こちらにも覚悟を決めるしかない。

剛介は、まるで方向違いのようだったが、「負けたくない」と感じていた。そっちがその気なら、こちらにも中途半端なことはできない。思う存分、亜由美を恥辱と苦痛の中へ突き落としてやらなければならない。

ピンポン球を見せると、亜由美は黙って四つ這いになり、尻を広げた。

浣腸でほぐれた肛門。

そのすぐ下から、一筋の亀裂が伸びている。

連日の輪姦で、少しだけ、だらしなくなっている。

ローションで粘膜をほぐし、剛介はピンポン球を亜由美に押しつける。

「自分から尻の穴を広げなくちゃ」

ムリな命令にも、必死に応えようと努力している。

「ほら、自分で呑み込むぐらいにならないと」

「はい」

少しは肛門のシワが伸び縮みするが、口のようにぱっくりと開くはずも

ない。腸が少し盛り上がる。充血した
粘膜が露わになる。

そこに球を押しつけると、以前より
すんなりと、半分ほど沈み込んだ。粘
膜がピンポン球をくわえて体内に戻
って行く。

「よーし、うまいぞ」

「ああああ」と切ない声を出して、亜
由美は体内に異物が入っていく感触
を味わっていた。

本来は排泄するはずの器官が、逆に
呑み込んでいる。ローションのせいも

あつてか、痛みや抵抗感はかなり少ない。

ただ、恥ずかしいだけだ。

「おれにもやらせてくれ」と会員が志願し、ゆっくりと二つ目が押し込まれていく。

三つ、四つと続く。

以前は、半分しか入らなかった四つ目が、指先に押されて腸内の奥へ入っていくと、苦しいのか、亜由美は尻を大きくくねらせた。

「どうだ、入ったぞ」

「ひいー、ありがとうございます」

「亜由美のいやらしいケツ穴が、おいしそうに呑み込んだぞ」

会員たちも興奮している。

「立ってみろ」

「ぐうう」

おそるおそる亜由美は立ち上がる。腸内に入り込んだピンポン球が、ぐりぐりと動き、その感触に、きちんと立つことができない。

「ほら、まっすぐ立って！」

剛介に言われて、亜由美はきをつけ

の姿勢をとった。ぐりっと体内から亜由美を責める球に耐える。

「どう、気持ちいい？」

「はい。うはっ」

「どうして？」

「穴に、私のいやらしいお尻の穴に、ふひい、ピンポン球を四つも入れていたただいたからです」

腸が勝手に動く。そのたびに固い球がごろりと動くのである。

「そういのが好きなの？」

「ふうう、はい。変態の亜由美は、お

尻の穴に、いろいろなものを入れていただくと、うれしいんです」

「じゃ、次はピンポン飛ばしをしよう」

肉体に入れた異物を、手を使わずに排泄しなくてはならない。

部屋のすみに行き、四つ這いになった亜由美が、明るい窓に尻を向けて、腹部に力を入れる。

「うぐあ」

自然の摂理に逆らって、強制的に人の手で押し込まれたものを、今度は自

ら排泄しなくてはならない。

最初の一つがしだいに大きくなっていく。

肛門を押し広げる。粘膜を内側から盛り上げる。そして、吐き出す。床のビニールをボールが転がっていく。

「おお」と誰かが思わず声を出す。

すぐ二つ目が顔を出す。

以前よりはスムーズに出てくるようになった。それはローションのせいもあるが、このわずかな期間に、亜由美自身が、メス豚になりきっていった

からだろう。

「あっ」

二つ目のボールが飛び出し、転がる。ぬめぬめと光を放っている。間違いなく亜由美の体内にあったものだ。

剛介は言いようのない喜びを感じていた。

自分の考えていたことが、実現している。いや、考えていたこと以上だ。亜由美がここまで堕ちるとは、剛介にも想像できなかつた。

もっと手荒いことをしなければな

らないかもしれない、と思っていた。
相当なリスクを覚悟しなければなら
ないとも思っていた。

とはいえ、抜き差しならない事態と
なっているのは、亜由美も剛介も同じ
だ。剛介もそれは覚悟している。

「三つ目、いきます」

亜由美が宣言すると、カメラを構え
た会員たちが、「おー」と反応する。

腸内に残っている水、腸液にまみれ
たピンポン球が、また一つ、体内から
産み落とされる。

最奥の四つ目がうまく出るか。剛介は注目した。

亜由美は腹部をくねらせ、腰の上あたりに手をやり、絞り出すようにしながら、しばらく奇妙な尻踊りを見せた。

「はあ、きつい」と言った。

「ううう」とうめく。

どうやら直腸に球が戻ってきつつある。

その動きを亜由美は感じている。

S字結腸は、直腸やその先の大腸部分のように、腹部に固定されていない。

個人差が激しく、かなり長くくねっている場合もあるという。便秘がちな人だと、ここが太く長く伸びてしまっていることもあるらしい。

しかし亜由美は以前から浣腸を頻繁に繰り返し、異物挿入の経験もゼロではなかった。便秘であったことはないはずだ。もし便秘の兆候があれば、大好きな浣腸をする理由ができて、喜んだぐらいだろう。

剛介はそんな想像をしていた。

「四つ目、ふはっ、ふはっ。いきます」

いきみ続けていたためか、ピンクの肛門は、菊の花よろしく、ぺろっとめくれあがったように、大きく花びらを開いていた。

なにかを語りかけているかのよう
に、あえぐ粘膜。

その一番奥に、白いものがチラッと見える。

「見えるぞ、すぐそこだ」と会員。

いきんでも、もはや外に飛び出せるだけの粘膜部分は外に出てしまっていた。これ以上、下手に力を入れすぎ

ると脱肛してしまうかもしれない。

「はっ、はっ、はっ」

亜由美自身、そのことをよく知って
いるらしく、いっきに押し出すことは
せず、ときどき戻しながら、だましだ
まし、異物を外へと送り出そうとして
いた。

それがたまらない見世物になって
いるとも知らずに。

「ほらほら、どうした」

「また戻っちゃったぞ」

「よっほど、恥ずかしいことが好きな

んだな。いつまでも終わらないよ」

男たちが浴びせかけるヤジに、亜由美は頬を染めながら、荒い呼吸をしつつ、集中する。

どれぐらいの時間が経ったのだろう。とうとう四個目が全体像をはっきりと見せた。

「うーん、うはっ！」

ポトンと落下した。

期せずして拍手が起こった。

汗だくの亜由美は、うっすらと笑みを浮かべながら、妖艶な視線をカメラ

に向けていた。

剛介は生唾を飲んだ。

亜由美はすっかり変わった。そして、それを楽しんでさえいるのだ。それも剛介のためではない。会員のためでもない。自分自身のために……。

驚きと同時に、カチッと音を立てたかのように、剛介の嗜虐心がシフトアップした。負けてはいられない。もっと亜由美を苦しめ、おとしめなければ……。

通過儀礼

一日一食。それが亜由美の生活パターンになった。

温めていないコンビニの弁当の中身を洗面器にあけて、冷ましたカップうどんをかけ、ぐちゃぐちゃにしたものを与える。味よりも量だ、と剛介は思う。

今日からは、部屋での食事は、原則として手を使わせないので、食べやすくしなくてはならない。

お読みいただきありがとうございました。

SM小説ブログ「荒縄工房」

刊行作品情報は DLSite のページへ



ホームページ開設しました。